

教育点描

「組み木作り」を通して 思うこと

小黑三郎

(組み木デザイナー)



「組み木」という木のおもちゃを作り始めたのは、中学校の美術教師を九年勤めたあと、盲学校へ転任した三十代の初めの頃からである。全盲児にさまざまな形を触察させたかった。それには木材を電動糸のこで加工するのが便利だった。

盲学校と養護学校に十二年勤めている間に、弱視生徒が幾何形だけでなく、動物などの具象形も好んだので、動物の親子や家族をテーマにし、多くの組み木を教材として作った。この十二年間の体験は、おもちゃデザイナーとなるための基礎を私に学ばせた貴重な修養期間だった。

組み木は積み木と比べたら、まだまだマイナーの世界で、初めて見たという人が多い。電動糸のこで老若男女、小五の子どもでも作れる。オホーツクから沖縄まで全国各地の小学校の五、六年生を対象に、これまで述べ百校くらい訪ねて、「組み木の百分授業」をしてきた。子どもたちから触発されて発想を得ることも多かった。

小学校の授業のしめくくりについていつも言う言葉は、手を十分に使いなさい。頭でよく考えなさい。心を働かせて想像しなさい。この三つである。ものづくりのもっとも大切な「手と頭と心」の働き、これを忘れないために「Hand, Head, Heart」の三つのHと覚えさせる。

ものづくりだけでなく、この三つのHは生きる力を与えてくれる。実は、故・勝見勝さん(デザイン評論家)の全集を読んで知った言葉で、文豪ゲーテの言葉だった。

今は各地で組み木作りのワークショップを開いている。

オグロ サブロウ

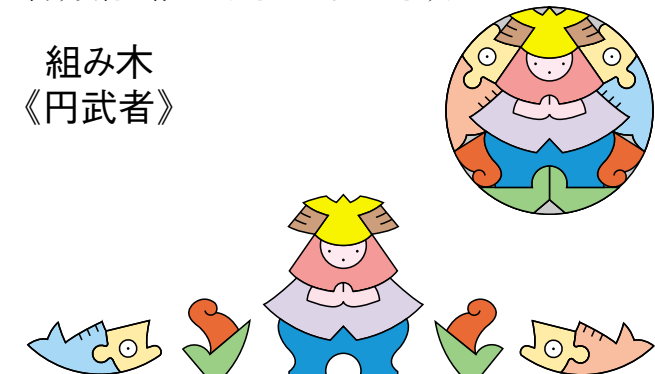
1936年東京都生まれ。多摩美大絵画科(油絵)卒。小黒三郎組み木館「ズートピア」館長(熊本県阿蘇郡小国町)。日本おもちゃ会議会員。日本クラフトデザイン協会会員。神奈川県内の盲学校、養護学校で勤務しながら教具作りを始める。1980年にネフ社(スイス)とデザイン契約。ヨーロッパで製品化を始める。1981年に教職を辞した後、1983年に木のおもちゃメーカー(有)遊プランを創設。1995年に小黒三郎組み木館「ズートピア」をオープン。現在では、国内にとどまらず、海外でも組み木の实技指導やワークショップを行っている。

三年ほど前から「木育」という言葉が大学の教育学部の教授から言われ始めた。木のおもちゃを作り始めた四十年前から、木育をしてきたと自分では思っている。

図工、美術、技術の教科が目指して力を入れて欲しいのは、木の文化を育てることである。今の子どもたちは、金づちも、のこぎりも、正しい使い方を知らない。家庭に道具箱がなくなって、あるのはドライバーとラジオペンチくらいである。ナイフを使って思わず指先を切り、血を出す経験は、昔は誰でもあったのだが…。

組み木の雛を収める容器として、十年ほど前から曲げわっぱを使い始めた。楕円形は木口クロで挽けないので、昔から作られてきた曲げわっぱに木片を収納しようと思ったのである。五段飾りで五個使うので百個注文したら業者に喜ばれた。昔はお弁当箱に使われ、かなり作られてきたのだが、今は作る職人もそれほど多くはいない。木の伝統工芸を育てるためにも、幼い頃から木に親しみをもち、木を使う文化を育ててゆきたいものと思う。

組み木 《円武者》



[特集] 小家,技・家における 指導方法のあり方

塚本
光夫

知識・経験・ビジョン



ツカモト ミツオ

1957年大阪府生まれ。大阪大学大学院工学研究科博士課程前期修了。大阪大学助手、(株)日本総合研究所、熊本大学講師、助教授、准教授を経て現在、熊本大学教授。主な著書に、『イラストでつかむ 子どもに「学習プレゼン能力」を育てるノウハウ』明治図書(分担執筆)、『漫画で納得あなたの授業が大変身! ITを自由自在に活用するヒント』明治図書(分担執筆)がある。

1. 3D到来

3Dが華やかだ。映画館やテレビの話である。3Dと言っても3次元物体が現実にあるわけではなく、裏側を見ることはできない。厳密には2次元映像の立体知覚である。あらゆる角度から立体的に見える本格的な3次元映像を映画として楽しむまでには至っていない。しかし、それでも飛び出して見える映像を初めて見ると驚嘆する。今のところ映画館では専用の眼鏡をかけないと3Dを実感できないのが煩わしいが、映像の素晴らしさには感心する。将来はリアルな3次元画像表示によって四方八方から見るできるようになり、今までとは全く異なる形の映画館が登場するかもしれない。

2. 明確なビジョン

残念ながら家庭で3D映画を見ることはようやく始まったばかりで、ほとんどは2Dのままである。映画館のような大画面での臨場感や3Dを味わえないにしろ、家庭でネット配信やDVD、Blu-rayディスクなどの媒体を通じて映画や番組を観ることはすでに一般的になっている。そのなかでも、販売しているディスクの映画を観ると、原語と日本語吹き替えの切り替えや字幕表示の切り替えができることはもちろんのことであるが、特典として、本編では削除された場面やNG集、本編とは異なるエンディング、俳優・スタッフ紹介、監督による解説、予告編などがあり、メイキングと称する制作の背景・過程・裏話などを紹介したものも含まれている。映画館では観ることができない内容を知ることができるのはとても面白い。

外国映画のメイキングを観ていると、俳優やスタッフによる監督に対する評価がある。「監督には明確なビジョンがある。明確な指示があって、理解しやすい。」などと言う。ここでいうビジョンとは将来の展望あるいは構想などを意味しているのであろう。意地の悪い見方をすれば、明確なビジョンやイメージを持たず、行き当たりばったりで、いい加減な指示しかせず、理解不能な監督がいるということなのだろうか。明確なビジョンや計画・予定・目的・目標がなく、しかも明

示されなければ周囲の人が混乱することは自明である。明確なビジョンはどのような立場でも重要である。

熟練教師の授業をある単元に関して継続的に観察してみると、次のことがわかる。

- 1) 教師も子どもたちも現時点であることを理解している。
- 2) 教師も子どもたちも次に何をするかを知っている。

簡単なことであるが、以上のことをするためには授業に対するビジョンが明確であると同時に、それが明示されて、教師と子どもたち間で共有されていることが必要である。

3. 教師のビジョン

図1と図2は平成21年の7月から9月にかけて私の研究室で実施した全国都道府県の生徒数200人以上を目安とした中学校300校(私立を除く)を対象にアンケートを行った結果の一例である。回答数は136校であった。学習指導要領の改訂にともなって、計測・制御はどのように扱われているのかを調査するために実施した。

計測・制御に関する内容が必修になったことから、準備はできているかどうか、すでに実施しているのかわかるを知るために質問を行った。図1は「プログラムによる計測・制御に関する授業を行っていますか。また、平成24年度以降にプログラムによる計測・制御が必修となった際の授業内容を予定していますか。」に対する回答である。現在3/4の学校が計測・制御の授業を実施していないと回答し、4割の学校で授業内容について未定であるとしている。

つまり、多くの学校で明確なビジョンを示す状態にはない。その原因は何であろうか。

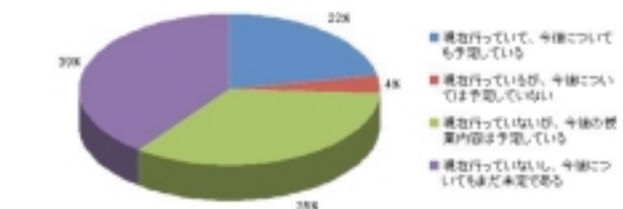


図1

4. 知識と経験

図2は「プログラムによる計測・制御に関する授業を行う上で、何が難しいと思いますか。(複数回答可)」に対する回答である。「費用がかかる」の回答が最も多く、次いで「自身の制御に関する教育に関する知識に不安がある」、「制御に関する教育の実践経験がない(少ない)」が多く、いずれも回答校数の約4割である。図1の授業内容は未定であると回答した割合にほぼ一致する。すなわち、予定が未定なのは知識と経験への不安が原因のようである。「時間が足りない」の回答が多いと予想していたが、そうではなかった。金・教養・経験の3Kが足りないようである。

したがって、費用に対する困難さを除けば、教師が計測・制御に関する学習を行い実践してみることが、教師の不安を解消し、明確なビジョン形成への第一歩である。

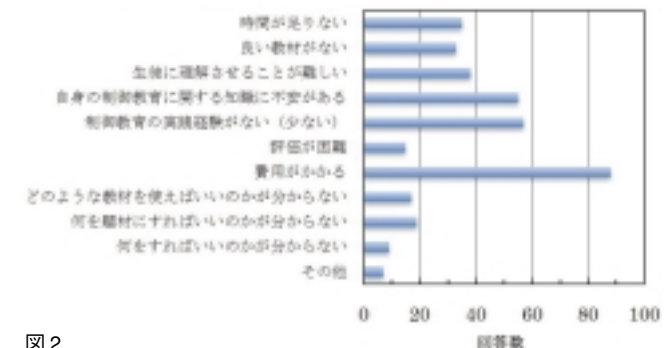


図2

5. おわりに

3D映画の売り上げが好調らしい。となれば、これから益々3D映画の本数が増えるだろう。しかし、3Dだからといって、良い映画とは限らないし、それだけで売り上げが良くなるわけではない。シナリオ、俳優、スタッフ、環境、資金、技術、時間、広報なども関係する。そしてそれらを基盤として、実現するためのビジョンが必要であろう。

教師にとっても同様である。知識と経験を獲得することは重要であるが、知識と経験だけで仮想化すると迷走してしまう。ビジョンが加わることによって教えることへのリアルな3次元が実現するのである。

[特集] 小家,技・家における 指導方法のあり方

長島 淑子

「特定の課題に関する調査」から見る
生徒の実態を
これからの指導に生かす



ナガシマ ヨシコ
1963年 埼玉県生まれ。
埼玉県中学校教諭、さいたま市中学校教諭、元文部科学省国立教育政策研究所教育課程調査官。現在さいたま市教育委員会学校教育指導2課主任指導主事。

はじめに

平成21年3月、国立教育政策研究所より「特定の課題に関する調査」の結果が報告された。この調査は、平成19年に約1万6千人の中学3年生を対象に実施され、技術・家庭における基礎・基本となる知識と生活で活用する力の実現状況をペーパーテストで、基礎・基本となる技能の実現状況を実技調査で把握したものである。技術・家庭科についての全国規模の学力調査は41年ぶりであり、実技調査は初めての試みである。この調査の分析を今後の学習指導に生かすため、ここでは、調査結果から見えてきた生徒の課題とその実態を踏まえた今後の学習指導の改善について新学習指導要領の4つの内容ごとに解説する。

「A 家族・家庭と子どもの成長」

【調査結果から見えてきた課題】

- ①家族との具体的なかかわりを考えること
- ②幼児の観察を通して、ことば、情緒・社会性、運動機能について年齢による幼児の行動の特徴を読み取ること

【学習指導の改善】

- ①家庭生活の中の具体的な家族とのかかわりの場面を想定したロールプレイングや、よりよいかかわり方を考えられるような資料を用いた話し合い活動を取り入れ、家族関係をよりよくする方法を考えさせる。
- ②実際に幼児を観察したり、幼児との触れ合い体験等の実践的・体験的な学習活動を取り入れることで、幼児とのかかわり方を体得させる。また、その体験をより効果的にするために、体験の目的や観察のポイントを明確にすること、事前・事後指導を充実させること、体験を振り返り、感じたことや分かったことをレポートにまとめたり発表したりするなどの言語活動を充実させ、概念的な把握を促す指導をすることなどが大切となる。

「B 食生活と自立」

【調査結果から見えてきた課題】

- ①栄養素や食品群に関する理解やそれを活用した献立の作成

- ②旬の一般的な特徴などの理解
- ③食材の効率的で安全な切り方などの技能や、料理に適した材料の厚さの理解や切り方の工夫
- ④計量スプーン・計量カップの容量についての理解

【学習指導の改善】

- ①・栄養素や食品群、旬などについて身近な食品と結びつけて具体的に学習させたり、学校給食などを活用し、日常的に栄養や献立について考えさせ、知識の定着を図る。
・学習した栄養や食品の知識を活用して1日分の献立に不足している栄養やそれを補う方法を考えるような課題解決の場面を繰り返し設定する。
- ②栄養や旬を考えて食品を選択・購入する体験を取り入れるなど、実践的な学習をする。
- ③調理実習においても、効率よく安全に切る方法、煮える時間を考えた厚さ、食べやすい大きさなどを考えさせる場面を設定する。
- ④小学校における計量などの基礎・基本を徹底し、実態に応じて、不十分な知識・技能については中学校で再度取り上げ定着させる。
さらに、自分たちで整えた献立を実際に学校や家庭でつくるなど、献立の学習と調理を一体化させ、学んだ知識を実践に生かす態度を養うなど様々な工夫により、学校全体として魅力ある食育を推進し、子ども達の健全な食生活の実現を図ることが望まれる。

「C 衣生活・住生活と自立」

【調査結果から見えてきた課題】

- ①洗剤の量による汚れの落ち方についての理解
- ②衣服の補修・製作の基本的な技能として、玉どめ、玉結び、まつり縫いを適切に行うこと
- ③家庭内事故の要因を、幼児や高齢者の特徴をふまえて具体的に考えること

【学習指導の改善】

- ①実感を伴う観察・実験などを取り入れ、体験的に理解させたり、環境への影響を考えさせたりする指導の工夫
- ②製作においては、小学校家庭科、及び、中学校技術・

家庭科で学ぶ基本的な技能の習得とともに、実生活で必要な補修の場面に応じた対応を考えさせる指導の工夫

- ③幼児や高齢者の心身の特徴がイメージできるような具体的な場面を設定して考えさせ、実践につながる指導の工夫

「D 身近な消費生活と環境」

【調査結果から見えてきた課題】

- ①通信販売で購入した商品の正しい返品方法や消費者を保護するための制度の理解
- ②カードなどの目に見えない金銭の動きに関する理解やリサイクルなどの正確な理解

【学習指導の改善】

①②日常生活の中における具体的な事例を通して、消費者としての適切な行動や環境に配慮した生活を考える力を育成する必要がある。そのためには、衣食住や家族に関する学習の中に、身近な消費生活や環境問題と結びつけた具体的な事例を取り入れた指導を行い、確実な概念形成を図ることが大切である。例えば、Aの内容においては、遊び道具やその材料選択、購入など、Bの内容においては、食品の選択、環境に配慮した調理、ゴミの分別など、Cの内容においては、衣服の表示と選択、リサイクル、環境に配慮した水や洗剤の使い方、室内環境の整え方などに関連させ、具体的な場面を取り上げて様々な角度から考え、工夫させる実践的な学習をすることが有効である。

終わりに

調査とともに行った質問紙調査からは、家庭分野の内容が「好きだ」「経験がある」と回答した生徒の方が、正答率が高い問題が多数見られた。これら生徒の実態を考慮し、これからの社会で求められる能力等の育成を目指した授業の実践に努めていただきたい。

【参考文献】

「学習指導要領解説技術・家庭編」文部科学省H20
「特定の課題に関する調査」国立教育政策研究所

エネルギーの有効利用に関わる教材開発

～回生ブレーキ装置～

北海道札幌市立新陵中学校 本間 正和

1. はじめに

現在、人類が次の世代にこの地球を残す上で先送りできない問題の筆頭は、エネルギー環境問題である。地球温暖化により北極の氷が減少し、世界的異常現象がおきるなどその問題はますます深刻化している。そのような中、これからの時代を築く上で中心となる子どもたちが、安全で豊かな生活を送るためにも、エネルギー環境についての学習をすることはますます重要となってくると考える。

ところが、生徒たちの現状をみると、日常生活している中でこの問題に関心をもち深刻に受け止めている生徒が少ないのが現状といっても過言ではない。そこで、このエネルギー問題に関心をもち取り組めるようにすることが必要と考え、この題材を設定した。

さて、私たちは、実生活の中で技術の進歩がこの問題に大きく貢献していることに気づかず生活していることが多い。白熱電球が蛍光灯へと変わり、信号機も電球型から発光ダイオード型へと変わる。家庭では消費電力が少ない節電型の大型電化製品が出回るなどエネルギー消費を抑えるものが増えてきている。そのような中、近年は回生ブレーキなどのように、今まで取り戻せなかったエネルギーをさらに有効に利用する技術が開発され実用化されてきている。しかし、生徒はこのような技術の存在さえ知ることがなかったり、意識することなくその恩恵を受けているのが現状である。

そこで本授業では、そのような意識化されていなかった部分に視点をあて、これまでのような消費エネルギーを少なくする発想から、無駄にしていたエネルギーに着目することに主眼をおき授業構成することとした。本題材では私たちが生活している身の回りを振り返りエネルギーをさらに有効に使うための関心を高め、新たな技術を創造するきっかけがつかめればと考え本題材を設定した。

2. 回生ブレーキについて

回生ブレーキは、通常は駆動力として用いているモータ

を発電機として作動させ、運動エネルギーを電気エネルギーに変換して回収することで制動をかける電気ブレーキの一手法。発電時の回転抵抗を制動力として利用するもので、電力回生ブレーキ、回生制動とも呼ばれる。電動機を動力とするエレベータ、電車、自動車他、広く用いられる。このように従来利用されている摩擦ブレーキが熱エネルギーに変換されていることから考えても、回生ブレーキはエネルギー環境に配慮した次世代のブレーキであると考えられる。



3. 教材について

開発した回生ブレーキの教材は、図1の模型車がベースとなる。手回し発電機により模型車のモータが駆動し、コントローラ手元のスイッチを切りかえることでモータが発電機として作動する仕組みになっている。また、回生ブレーキの仕組みを理解しやすいように2つの付属品を準備した。電球を配線することにより、光エネルギーに変換する装置と、蓄電池を接続することにより電気エネルギーとして蓄えられる装置である(図2)。回路の構成は図3のようになる。各班に2台、予備を含め20台作成した。



図1 ベースとなる模型車

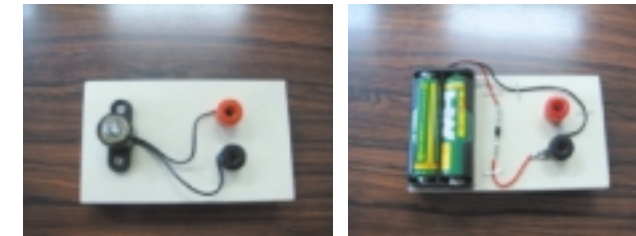
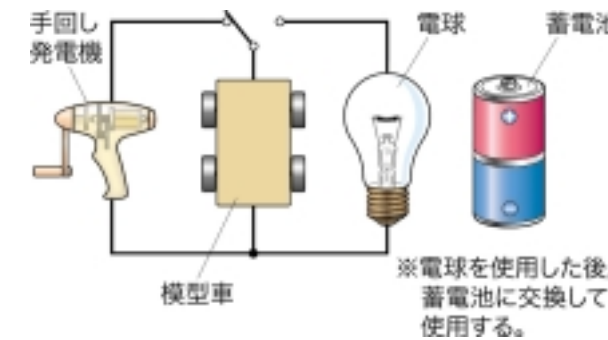


図2 光エネルギーに変換する装置(左)と電気エネルギーとして蓄える装置(右)



4. 授業展開について

授業展開は以下の3つの流れで構築することにした。

- ①電球を配線し光エネルギーに変換することで回生ブレーキの原理を学習する。
- ②蓄電池を配線し蓄えた電気エネルギーでモータを動かす再利用できることを学習する。
- ③身の回りの生活で回生ブレーキやエネルギーを有効利用できる場を検討する。



技術・家庭科の学習は身の回りの生活と結びつけることが大切であるため、③の展開が重要であると考えた。

①の展開では、模型車を駆動させスイッチを切り替えるとブレーキとともに電球の光る様子から、運動エネルギーが光エネルギーに変換される回生ブレーキの原理を学習することができた。②の展開では、回生ブレーキをかけることで蓄電池に電気が蓄えられ、10回ほどブレーキをかけることで、約10秒モータを回転させることができた。③の展開では、教科書で取り上げられているハイブリッドカーや、新聞で取り上げられた札幌市内で実験走行されている路面電車を例に、回生ブレーキやエネルギーの有効利用が考えられる場ごとに検討させた。その結果、回生ブレーキの活用として、電動自転車、エアロバイク、飛行機、船、掃除機、換気扇等の例を、エネルギーの有効利用として暖房の余熱でお湯を沸かす例を挙げる事ができた。

また、生徒の感想から回生ブレーキの原理を楽しく学習することができた。エネルギーの有効利用を考える良い機会となったという生徒が多く、中には、回生ブレーキの利用が広まっていない現状から問題点を考える生徒もいた。

5. まとめ

技術・家庭科は日常生活と関わりが深いため、生活に結びつく教材を準備し、学習意欲を向上させることが重要である。生徒にとって回生ブレーキは馴染み深くなかったが、ハイブリッドカーは誰もが知っており、その秘密に興味を感じる生徒が多かった。また、生徒が実際に操作できる動く模型は、わかりやすく楽しい授業につながり、学習意欲を向上させることができたと感じている。

成果としては、エネルギーの有効利用に関する授業の構築ができたこと。回生ブレーキの教材を具現化した教材の開発ができたこと。身のまわりの生活におけるエネルギーの有効利用についての意識向上ができたことが挙げられる。

課題としては、エネルギーの有効利用についてのさらに効果的な教材開発を続けていきたいこと。他教科(特に理科)との学習内容のつながりを検討する必要があることが挙げられる。今後も技術の進歩に応じて継続的な実践研究を行っていきたいと考える。

【参考資料】

フリー百科事典「ウィキペディア(Wikipedia)」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)の回生ブレーキの項目

家庭科・図工科と食育の教科横断的な実践

奈良県奈良市立東登美ヶ丘小学校 校長 川本 敦子
 栄養教諭 吉田 廣子
 家庭科担当 田中香奈子

1. はじめに

新学習指導要領の改訂により、第一章 総則に「学校における食育推進は、学校教育活動全体を通じて行うこと」と明記された。

各校では、計画的に食育を推進するため、児童生徒の発達段階に応じ継続的に、また特別活動や総合的な学習などを含む各教科の横断的な取り組みを推進するために学校全体の「食に関する指導の年間指導計画」を作成している。

今回は、本校で「お弁当」を題材に図画工作科と家庭科のそれぞれの目標を達成し、食育に取り組んだ実践を紹介する。

2. 実践について

(1) 図画工作科の学習

図画工作科では、紙粘土を主材料に、これまで食べた自分の弁当や家庭科での学習をもとに、自分が食べたいと思う弁当を考え、本物そっくりに作るという立体表現学習を行った。児童たちは、料理の本やスーパーのちらしなどを参考にし、本物の料理や食材の形・色・質感に近づけるように工夫をしながら取り組むことができた。



(2) 家庭科の学習(全10時間)

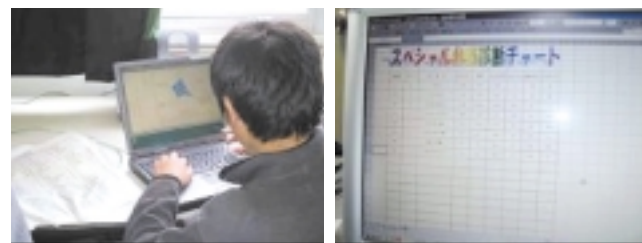
① 五大栄養素を知ろう

家庭科では、図画工作科で作った紙粘土の弁当のメニューを、5年生から学習している栄養三色に分け栄養のバラ

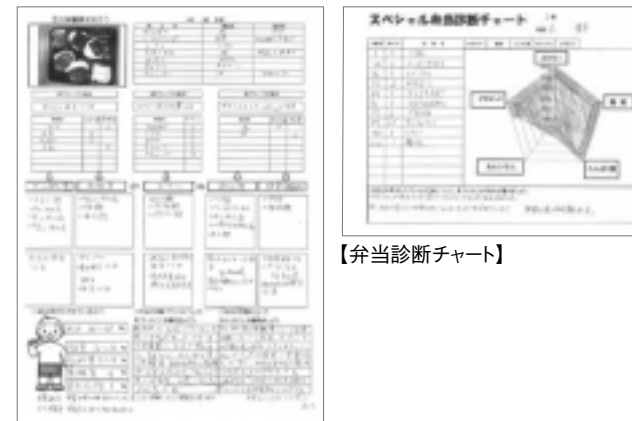
ンスを確認した。続いて新学習指導要領改訂により導入される「五大栄養素」の学習につなげた。この学習では、家庭科教諭と栄養教諭がチームティーチングで行った。家庭科教諭が家庭科の目標を押さえ、栄養教諭が専門的な知識を生かし、「五大栄養素」を児童が自分の体験や生活に結び付け、理解できるようにわかりやすく、また興味深く学習することができた。

② コンピューターで栄養診断

次に、オリジナルソフトを使い、コンピューターで紙粘土弁当の栄養診断を行った。栄養三色や五大栄養素の分け方は、食材の品数がもとなる。例えば、弁当箱の半分くらいの量を占めるごはんと少しのゴマも同じ1つにカウントされる。オリジナルソフトでの栄養診断では、当てはまるおかずの番号を選び、量はアルミのカップ1つ分を1ポイント、半分なら0.5ポイントと入力すると、チャートグラフに五大栄養素の栄養量のバランスが表される。



この学習では、自分の弁当の栄養バランスが視覚により理解できるだけでなく、たまご焼きや果物など単品の栄養的な特徴を知ることでもできる。児童は「無機質がとりにくいけどどうすればいいの」「レタスを選んでいるけどビタミンがとれない」「和食の組み合わせはバランスがとりやすい」「好きなものばかり組み合わせると脂肪が多くなる」などの疑問や気づきが多くあった。



【弁当診断チャート】

【ワークシート】

③ スペシャル弁当を作ろう

そして、調理実習で弁当を作るため「献立の立て方のポイント」「奈良県の地場産物である大和野菜の紹介や旬について」などの学習を行い、グループで話し合い、献立の計画を立てた。

弁当の食材の費用には、その日の給食費を充てた。食材の購入については、「物や金銭の使い方と買い物」の体験学習として、調理実習の前日に、近くのスーパーマーケットに学級ごとに買いに行くことにした。調味料や野菜はまとめて、そのほかの食材はグループごとの購入とした。家庭科教諭が、スーパーマーケットに事前に連絡を入れたり、児童に買い物のマナーや注意事項の確認を行ったりし、学級担任と栄養教諭も付き添って買い物学習を実施した。児童は、各グループごとに、「班長・会計係・記録係」の役割を決め、量や価格、新鮮さなどを話し合いながら買い物することができた。持ってきたエコバッグに商品を移し替え、学校に戻った後、レシートと合わせて会計報告と買い物をするときに気をつけたことをワークシートに記録した。

児童は、日ごろから保護者と一緒に買い物をしているが、自分たちで、探したり選んだり購入したりする経験は少ない。そのため、野菜の鮮度や種類、缶詰のスイートコーンとクリームコーンの違いなどで迷っていたグループもあったが、食材の産地や賞味期限についても確認しながら購入していた。児童にとって、大変よい体験・経験ができたのではないと思う。



【買い物学習】



【弁当の調理実習】



【弁当のでき上がり】

3. 終わりに

今回、教材とした「お弁当」は、児童にとって遠足や運動会などの特別な日のものであり、楽しみで魅力のあるものであるため、興味関心が高く、意欲的に取り組むことができたと感じた。

また、学年の担任と家庭科教諭、栄養教諭が指導計画を話し合い、連携を密に取り組むことができたことが成果につながったのではないと思う。

今回の取り組みは、食に関する指導目標である「食事の重要性」「心身の健康」「食品を選択する力」「感謝の心」「社会性」「食文化」のすべてに関連させることができたのではないかと考える。児童には、これらの学習を、各家庭で日々の生活の中で、活かしてくれることを願っている。

小学校家庭と中学校技術・家庭「家庭分野」の学習指導は、次のように系統化をはかることができます。

学校種	小 学 校	
	5 年	6 年
A ④ ⑤ ⑥ 家庭生活と家族 家族・家庭と子どもの成長	(1) 自分の成長と家族 ア 自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付く。 ○ガイダンス(さあ、家庭科を学びましょう、2年間で学ぶ家庭科) ○見つけてみよう わたしと家族の生活 ○成長したわたしたち	
	(2) 家庭生活と仕事 ア 家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、自分の分担する仕事ができる。 ○できるようになったかな 家庭の仕事 ・わたしにできる家庭の仕事を増やそう ・家族に協力して仕事をしよう イ 生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力する。 ○くふうしよう 朝の生活 ・生活時間を見直そう ・共に過ごす時間をつくろう	
B ④ ⑤ ⑥ 日常生活と自立 食生活と調理の基礎	(1) 食事の役割 ア 食事の役割を知り、日常の食事の大切さに気付く。 ○元気な毎日と食べ物 ・どんな食品を食べているだろう ・バランスのよい食事をしよう ○くふうしよう 朝の生活 ・朝食を考えよう イ 楽しく食事をするための工夫をする。 ○はじめてみよう クッキング ○くふうしよう 楽しい食事 ・家族と楽しく食事をしよう	
	(2) 栄養を考えた食事 ア 体に必要な栄養素の種類と働きについて知る。 イ 食品の栄養的な特徴を知り、食品を組み合わせると必要なことが分かる。 ウ 1食分の献立を考える。 ○元気な毎日と食べ物 ・バランスのよいごはんやおかずをつくろう ○くふうしよう 朝の生活 ・朝食を考えよう ○くふうしよう 楽しい食事 ・バランスのよいごはんやおかずをつくろう ○くふうしよう 楽しい食事 ・身近な食品でおかずをつくろう(じゃがいもの調理)	
(3) 調理の基礎 ア 調理に関心を持ち、必要な材料の分量や手順を考えて、調理計画を立てる。 イ 材料の洗い方、切り方、味の付け方、盛り付け、配膳(ぜん)及び後片付けが適切にできる。 オ 調理に必要な用具や食器の安全で衛生的な取扱い及びこんろの安全な取扱いができる。 ウ ゆでたり、いためたりして調理ができること。 ○はじめてみようクッキング ・クッキング はじめの一歩 ・ゆでてみよう ・ゆで野菜のサラダをつくろう エ 米飯及びみそ汁の調理ができる。 ○元気な毎日と食べ物 ・ごはんのみそ汁をつくろう		

(ABCDや(1)～(3)、アイウエは学習指導要領の表現です。○や・部分は新教科書のタイトル・内容等を表しています)

中 学 校	備 考
(1) 自分の成長と家族 ア 自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考える。 (2) 家庭と家族関係 ア 家庭や家族の基本的な機能と、家庭生活と地域とのかかわりについて理解する。 イ これからの自分と家族とのかかわりに関心を持ち、家族関係をよりよくする方法を考える。 (3) 幼児の生活と家族 ア 幼児の発達と生活の特徴を知り、子どもが育つ環境としての家族の役割について理解する。 イ 幼児の観察や遊び道具の製作などの活動を通して、幼児の遊びの意義について理解する。 ウ 幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かかわり方を工夫できる。 エ 家族又は幼児の生活に関心を持ち、課題をもって家族関係又は幼児の生活について工夫し、計画を立てて実践できる。	小学校では、4年までの学習を振り返り、2学年間の見通しがもてるようにするためのガイダンスとして扱い、またA～Dの学習を貫く視点として各内容とも関連させて取り扱う。 中学校では、小学校家庭科の学習をふまえて、3学年間の見通しをもたせるためのガイダンスとして扱い、またA(2)・(3)の導入として関連を図って取り扱う。 ④ (1)ア・イ B(2)・(3)の項目ほか、アではA(2)「家庭生活と仕事」の内容、イではA(3)「家族や近隣の人々とのかかわり」の内容とも関連を図るように配慮する。
(1) 中学生の食生活と栄養 ア 自分の食生活に関心を持ち、生活の中で食事が果たす役割を理解し、健康によい食習慣について考える。 イ 栄養素の種類と働きを知り、中学生に必要な栄養の特徴について考える。 (2) 日常食の献立と食品の選び方 ア 食品の栄養的特質や中学生の1日に必要な食品の種類と概量について知る。 イ 中学生の1日分の献立を考える。 ウ 食品の品質を見分け、用途に応じて選択できる。 (3) 日常食の調理と地域の食文化 ア 基礎的な日常食の調理ができること。また、安全と衛生に留意し、食品や調理用具等の適切な管理ができる。 イ 地域の食材を生かすなどの調理を通して、地域の食文化について理解する。 ウ 食生活に関心を持ち、課題をもって日常食又は地域の食材を生かした調理などの活動について工夫し、計画を立てて実践できる。	④ (2) B(1)・(3)の項目や給食の献立との関連を図り、日常生活に即して具体的に学習できるようにする。 ④ ⑤ (2)ア・イ これまで中学校で扱っていた五大栄養素を、小学校で扱うこととなった。中学校で学習する日本食品標準成分表や食事摂取基準、食品群別摂取量の目安などの学習につなげる内容として、小学校では五大栄養素の基礎的事項について扱うように配慮する。 ④ ⑤ (3) 生の肉や魚は小学校では扱わず、中学校で取り扱う。 ④ 「食育」の充実 小学校においては、家庭科などの食に関する指導を中核として、教育活動全体で一貫した取り組みを推進することが大切。 家庭科教育では、食事を大切にする心、望ましい栄養や食事のとり方、食品の品質や安全性等に関する基礎知識、調理の基礎的・基本的な知識・技能などを総合的に育む観点から推進することが必要である。 ⑤ (1)～(3) これらの内容の指導に当たっては、小学校で学習した「B 日常生活と調理の基礎」の内容(1)・(2)・(3)に関する基礎的・基本的な知識と技能などを基盤にして、適切な題材を設定し、相互に関連を図って総合的に展開できるように配慮する。

表紙からガイダンスが始まります

●はじめての家庭科の授業に、期待をふくらませる子どもたち…。そんな子どもたちに、まずは表紙からストーリー性のあるガイダンスが始まります。

	表紙	2年間を見通して さあ、家庭科を学びましょう	2年間で学ぶ家庭科	1 見つめてみよう わたしと家族の生活
ガイ ダ ン ス				
	5年生での実践・体験的な学習			
ま と め 5 年 生 の	家庭科の学習をふり返り、生かそう 環境を考えた「エコライフ」をくふうしよう			
	6年生での実践・体験的な学習			
	考えよう これからの生活 <ul style="list-style-type: none"> ① わたしたちの生活と環境 ② 感謝の気持ちを伝えよう ③ 人びとや環境とのかかわり 			
2 年 間 の ま と め	2年間のまとめと中学校への橋渡し <ul style="list-style-type: none"> ・小学校でできるようになったこと ・中学校に向かって…技術・家庭科で学びたいこと 			

基礎・基本を繰り返し、積み上げていくことで学習が定着します

- 基礎・基本の定着を図るためには、繰り返し学習して習熟度を高めていくことが大切です。
- 5学年1学期で、調理の基礎を確実に身につけるために題材を細かく構成・配列し、スモールステップで学習を積み上げられるようにしています (p.6~15)。また、製作の基礎的技能を、作品づくりを楽しみながら繰り返し練習することで身につけることができます。(p.16~22)

	ガスこんろで湯をわかす たまごをゆでる 水をゆでる 青菜をゆでる ふっとうした湯でゆでる ゆで野菜のサラダをつくる 切る・ゆでる・調味する ほかの調理実習へ
2 は じ め て み よ う ク ッ キ ン グ	1 クッキング はじめの一步 〈湯をわかしてみよう〉
	2 ゆでてみよう ① 〈たまごをゆでよう〉 ふっとう後 3分 ▶▶ 5分 ▶▶ 10分 ▶▶ 15分 ② 〈青菜をゆでよう〉
3 は じ め て み よ う ソ ー イ ン グ	玉結びのしかた (ぬい始め) 玉どめのしかた (ぬい終わり)

「快適な衣生活と住生活」は 学ぶ時期・学ぶ季節を適切に設定しています

●「快適な衣生活と住生活」は、学習する子どもたちが一番実感できる時期や季節を考慮して、2つの題材構成とし、2学年間にわたって段階的かつスパイラルに学べるようにしています。そうすることで、学習意欲も高まり、学習効果が得られます。

5学年標準(冬季) (p.52～57)

寒い季節を快適に

1 あたたかい着方をくふうしよう

① あたたかい着方を考えよう
② 衣服のはたらきを考えよう

2 あたたかく明るい住まい方をくふうしよう

6学年標準(夏季) (p.76～83)

暑い季節を快適に

1 すずしい住まい方をくふうしよう

2 すずしい着方をくふうしよう

① すずしい着方を考えよう
② 衣服を清潔に整えよう

3 洗たくをしてみよう

2学年にわたって学習する意義

- 人間を包むいちばん身近な環境である「衣」の内容から始めます。
- 「衣服のはたらき」は、なるべく早い時期に学ぶことによって、着方の工夫が実践できます。(保健衛生的・活動的なはたらき)
- 人間を取り巻く身近な環境である「住まい」に関して、あたたかく明るい住まい方を工夫できます。
日光・自然の利用・暖房器具の利用
- 住まい方の学習(すずしい住まい方)から始めます。(夏をすずしくするためには、まず住まいやその周辺の外の環境をすずしくすることから)
- すずしい着方を考えたら
↓
夏は特に汗をかくなどするので衣服を清潔に。
↓
衣服の手入れ(洗たく実習)

このように、題材と題材が常に関連して、ストーリー性のある学習になります。

生活科学の目を養う 実験・観察等で事象や原理を科学的に理解し、生活実践につなげる。 ▼p.79

学校ですずしくするくふう

〈例1〉植物を利用して暑さをさげる(緑のカーテン)

植物の葉は日光をさげ、葉から出る水分のはたらきにより、周囲の湿度を下げる。湿度が高くなると色がぐく、強い日よけ効果がくくなる。

▲p.79(すずしい住まい方のくふう例)

寒さから身を防ぐことを考える場合は、まず暖かい着方を、一方、「暑い季節を快適に」では、天候との関係で洗たくの実習を7月に扱えるようにするため、住まい方が先です。

「寒い季節を～」では、①省エネ(環境)とも関連させ、まず重ね着の工夫(衣の環境)、②次に暖房を用いた工夫を考える流れです。「暑い季節～」では、涼しくするために、①窓を開けたり、打ち水をしたり、自然の力を利用したりするなどの外的環境を工夫、②次に涼しい着方の工夫や着方を学んだ後に、着用後の汗で汚れた衣服を洗たくする、というように、時間軸を意識した流れです。

環境教育は日常生活に直結しています

●「ごみを出さない(断る)」ことが出発の4Rでまとめています。

家庭科の学習をふり返り、生かそう
かんさよう
環境を考えた「エコライフ」をくふうしよう

ごみを少なく
断る
減らす
再利用する

する4つのR
断る
減らす
再利用する
再資源にする

チャレンジ
エコ生活をしよう
エコ情報を集めよう
エコ情報をまもろう

まとめのことも発表しよう

▲p.60～61

3トライ! エコ生活

節約・省エネやリサイクルなど、環境にやさしい生活をしよう

水・電気を節約しよう
リサイクルしよう
ごみを減らそう

▲p.74～75

●題材(項目)としての「環境」と、調理実習や整理・整頓、洗たく等、衣・食・住に関する学習の中での実践的な「環境」の両面から取り上げています。そうすることによって、日常生活に直結した、生きた環境教育ができるのです。

マークのある教科書ページ
p.7, 12, 28, 29, 57, 60～61, 67, 73, 74～75, 78, 79, 83, 103, 107～108

給食からつながる「食」の学習を大切にして



▲p.38~39

▲p.106 (折り込みページ)

導入は給食から

食品の3つのグループと五大栄養素のはたらき、食品の関係がわかります

折り込み (p.106) の「栄養素のおもなはたらきと食品の分類」は、食に関する学習時に開いたままで活用できます。



▲p.96~97

▲p.106 (折り込みページ)

います

●食品の3つのグループと五大栄養素のはたらき、食品の関係がスムーズに展開されています。



▲p.41

▼p.59

▲p.1 (食事を通じた家族のふれ合い)

▲p.41 (食膳)



▶p.46



▶p.47



食卓と家族

家族団らの歴史の変遷
表 真美(おもて まみ)著
世界思想社
定価 本体2,300円+税

“幸せな家族”の象徴としての食卓「食卓での家族団らん」はどのように意味づけられてきたのか、言説の初出、歴史の変遷をたどり、今後の家族団らんに関する教育のあり方について考察する。(世界思想社)

「食卓での家族団らん」をテーマに、20年間研究を

続けてきた著者は、序章とあとがきの一節において、以下のように述べている。改めて、家庭科教育が担うべき方向性についての課題の大きさと重要性を考えさせられるものである。

(序章より)

「(前略)本書は、大きく分けて三つの部分からなっている。第Ⅰ部では、現在、食卓での家族団らんに抱かれているイメージと、戦前の食卓での家族団らんの実態を押さえる。第Ⅱ部では、明治期の婦人雑誌・総合雑誌、修身教科書、家事科・家庭科教科書を分析資料として、「食卓での家族団らん」言説の初出、近代から現在まで続けられてきた食卓での家族団らんに関する教育について明らかにする。そして第Ⅲ部では、第Ⅱ部までに明らかにした歴史の変遷と現在の実証研究をふまえて、食と家族の未来について考えたい。(中略)歴史を通して現代の問題を浮かび上がらせることが、本書の最大のねらいである。」

(あとがきより)

「食卓での団らんがいつから現在のように重要視されるようになったのか、かねてから不思議に感じていた。明治期の家事科教科書を調べてみると、現行の家庭科教科書のように、食卓での家族団らの推奨が行われている。家事科教科書を用いて食卓での家族団らんが日本の家族に定着した過程を明らかにすることは、家庭科教育、家政学原論と結びつく格好のテーマである。(中略)これからの食卓での家族団らんはどうなるのか、どのように教育していけばよいのか、本書では十分に答えを出したとはいえない。今後も研究を続けながら新しい道を探っていけたらと思う。」

本書の内容

- 序章 問題設定
- 第Ⅰ部 食卓での家族団らの現実と言説
- 第Ⅱ部 教科書・雑誌における食卓での家族団らん言説の歴史の変遷
- 第Ⅲ部 これからの食と家族